

採炭と友子制度

釧路での大規模な採炭は 1916 年に始まり、この地域の太平洋炭鉱は日本最大級の炭鉱になりました。採炭は、アセチレンガスを使ったカーバイドランプの光のもとで深い地下の炭層を掘るなど、厳しい肉体労働でした。

鉱夫たちは、「友子」と呼ばれる作業集団を組織しました。各集団では、監督の役割をする先輩鉱夫が親分となりました。新入りの鉱夫は、「友子」に加わる前に 3 年間弟子を務めるのが一般的でした。これらの集団は、日本で労働組合が設立される前に始まりましたが、技能の共有を進め、成員間の助け合いを促すという類似の役割を果たしました。「友子」の鉱夫たちは自分たちのお金を出し合って、怪我・災害・炭鉱の閉山の際には互いに助け合い、また結婚や葬式といった行事の費用に充てました。

新しい成員は、正式な儀式によって仲間に加えられました。この儀式では、結束の象徴として盃を共有し、他の成員と酒を酌み交わしました。「友子」の成員の氏名と住所は、紙の巻物に記されました。これらの一覧は、釧路への移民の傾向に関する知見を提供してくれます。友子制度は、1930 年にこの炭鉱に導入された機械化と社会保障の進歩によって、徐々に消えていきました。